
僕。

登木 橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕。

【Nコード】
N8699X

【作者名】
登木 橙

【あらすじ】
少年は言った。

「世界を変える事は容易い」 と。

少女は言った。

「そんな事に、どんな意味があるのか」 と。

神を信じるしかない少年と、
神を信じない少女。

生を軽蔑する少年と、
生を馬鹿にする少女。
何事にも無関心で、無気力で、
生きているのに死んでいるような2
人。
そんな2人が出会ってからの、
不思議な物語。

登場人物

なゆ

主人公。

自称普通の女子高生

本名不明。

冷めていて、独特の世界観を持っている。

世界や人、生と死すらもどうでもいいと思っている。

面白い事絶対主義。

それ以外では無気力。

僕／少年

謎の少年。

見た目10～15歳くらい。

真っ黒なのに真っ白。

どこか達観したような瞳をしている。

神を信じたくはないが、会ったことがあるから信じるしかない、と言っている。

常時無表情。たまに笑う。

黒猫

少年のペット(?)

いつも肩に乗っているか傍にいる。

雌。

人の言葉が分かっているようなそぶりをする。

彼方／弟^{かなた}

なゆの弟。

10歳。

世界中でただ1人、唯一なゆの本名を知っている人物。
なゆとは違い、無邪気で明るく、自由気ままな性格。
天才肌で、大抵の事は卒なくこなす。
姉思いの優しい子。

炉露 ろろう 凧 なぎ／友人

なゆの友人の1人。

隈が特徴的な美少女。

家はかなり有名。

お嬢様。

なゆに依存している。

登場人物（後書き）

ついに始めてしまいました…！
どうか長い目で見てください。

第一話

真っ黒で真っ白

始まりは、唐突だった。

それは、私の下校途中、友人達とは随分前に別れ、1人で歩いている時だった。

近道でもしようと薄暗い小さな路地に入り、少し早足で道を進む。

少しでも早く、家へ着くように。

特に意味は無いが、外にいるより家にいたほうが面白いことにありつけそうな気がするからだ。

そんな時、突然強い風が吹き、私は咄嗟に目を瞑った。

風が止み目を開けると、そこには1人の少年が居た。

真っ白。

それが、私が少年に抱いた最初の感想だった。

けれど、その考えはおかしいとすぐに打ち消した。

なぜなら、その少年にはどこも白い所が無かったからだ。

髪と瞳は、夜闇よやみと言うには暗すぎ、かと言って濡れ衣と言う程には美しく無かった。

まるで、人の欲望や怒り、哀しみ、狂気などの負の感情や、世界の混沌や闇などを全て混ぜ合わせたような、そんな不思議な色をしていた。

そしてその瞳には、静かに、しかし確かに燃えあがる怒りや、深い哀しみ、恐怖、絶望、混沌、諦め、達観、全てを知った者の静寂、苦しみ、虚無、そして何かを探し追い求めるような光^{やみ}など、様々な感情^{モノ}が入り混じっていた。

唇は血のように紅く、その肌のうえで、より目立って見えた。

服はかなりぶかぶかで、袖が着物のようになっており、紺色のかなり変わった物で、着物とはまた違った物のようだった。

また、所々ほつれ色褪せていたが、きつとかなり高級なものだったのだろう、生地良さはほとんど失われていなかった。

唯一白いのは、その大き過ぎる服から覗く、一度も外に出たことがないのであると思わせるほどに、病的なまでに白い肌だけだった。

そして、その少年は人形かと見間違えう程に、残酷なまでに冷たく美しく、また儚かった。

動いていることが、奇跡であるかのように。

そこに在ること自体が、間違いであるかのように。

一度でも瞬きをしようものなら、消えてしまうかのように。

そんな、何百年、何千年生きたであろう者の静けさや雰囲気などが感じられた。

そんなもの、知っているはずが、在るはずが無いのに。

また、その少年の傍にはまだ子供だろうか、小さな、少年と同じ黒をした猫が少年を守るかのように寄り添っており、警戒しているのか、違うのか、その紅い瞳を細め、こちらをじっと睨むように見つめていた。

少年は、私をその何も映っていないような瞳で見上げ、言った。

「初めまして、我が同胞。」

第二話

僕は僕、君は××。

何も話さない私に構わず、少年は話を続ける。

「いや：初めまして、では無いか。久しぶり、と言った方が正しいね。」

何故久しぶりなのかは分からないが、取り敢えず返事をする。

「初めまして、名前も知らない少年。」

今思えば、私のとった行動はおかしかっただろう。

突然目の前に現れた一目は瞑ったがそれは一瞬の事で、しかも周りには隠れられる場所はない一少年と、会話をしたのだから。

「ところで少年、君の名前は？」

名前が分からなければ、会話も難しい。

と言いかいろいろと面倒くさい。

なので、名前を聞いてみた。

しかし返ってきた言葉は

「僕は僕さ。それ以外の何でも無い。だから、好きなように呼んでくれて構わないよ。」

という、意味の分からないものだった。

「そう。それなら少年のままでいいね。」

呼び名やあだ名などを決めるのは苦手だ。

なので、少年のまま呼ばせてもらうことにする。

「いいよ。でも、君の名前を覚えてくれたらね。」
交換条件。

呼び方程度で出す人間を、私は初めて見た。
私以外で。

それにこの少年は、人の質問に答えなくせに他人に質問するらしい。

しかも、少年の話からすると私達は知り合いであるというのに。

「別に聞かなくてもいいんじゃないの。私達、知り合いらしいけど。」

「まあ、そうなんだけど。」

じゃあなぜ聞く。

「でも、念のためだよ。間違ってたら嫌じゃないか。」
本当に面倒臭い子供だ。

「なら、教えてあげようか。私はなゆ。もちろん、本名じゃない。
あだ名さ。でも生憎、私は他人に本名を教えたくない人種^{タチ}でね。友人達にも、そう呼んでもらってるんだ。だから君も、そう呼んでくれるとありがたいな。」

これは本当。

私は、他人に本名で呼ばれるのが大嫌いだ。

理由はあるはあるのだが、今はどうでもいいだろう。

それに、言っただって分からない。

なので、私は今まで一度も本名を名のった事が無い。

何があっても。

だから、私の名前を知る人間は、私以外に1人も存在しない。
いや、1人だけいた。弟だ。

「そっか、分かった。間違いないみたいだし、良かったよ。」

少年も納得したところで、気になっていた事を聞いてみる。

「ところで、我が同胞って、どういう意味かな。」

答えによつては、最悪だ。

すると、今までずっと無表情だった顔が、微かに歪んだ。

笑ったの、だった。

「そのままの意味さ。僕と君は同じ。ただそれだけの事。」

少年がそう言い終わると同時に、再び強い風が吹いた。

私はまた、目を瞑る。

目を開けた時にはもう、少年は、居なかった。

第三話

何かが起こる。それこそ喜劇。

「…面白い。」

本当に。

誰も居ない道で、私は1人呟く。
周りから見ればおかしい人と思われるだろうが、今はそんな事どうでもいい。

久しぶりに、面白いモノに出会えた。
最近と同じ日々の繰り返しで、正直、飽き飽きしていた。
そこで、あの少年だ。

意味の分からない事を言い、意味深な事を言い…言うだけ言って、消えていった。

こちらの質問には、ほとんど答えずに。

また、質問に対しての少年の答えは、私が思いつく中で1番悪いものだった。

それだけでも十分面白いと言うのに、更にあの少年は興味深い事を
して見せた。

突然目の前に現れ、突然消えた。

非科学的な事を言うならば、魔法を使ったかのように。煙のように。
手品などの類なら大抵の場合直ぐに分かるのに、今回だけは、分
らなかった。

その事がどうしようもなく、たまらなく面白い。
テンションが上がってしまうのも、仕方のない事だろう。

緩む頬も抑えずに、私は呟く。
狂ったように。

何度も何度も、同じ事を。
興奮を隠しきれない声音で。
何度も、何度も。

―ああ、本当に、面白い。面白い。 オモシロイ。

私は、これから起こるであろう事について考えながら、帰路についた。

次に会ったら、どんなことを言おうか、どんなことを聞こうか。
そんな事も、考えながら。

早く家に帰ろうと焦ることはしない。

こんなに面白い事があったのだ。

今日はもう、十分だろう。

十分すぎて、十分すぎる程に。

きつとこれから、ほんの数日間だけだろう間、面白い事が待ち受けているに違いない。

そんな確信に似た何かを胸に抱きながら、私は今日を終えた。

第四話

手放したモノの価値は、手放した人さえ分からない。

不思議な少年と出会った、次の日。

私は、何事も無かったかのように登校した。

でも、気持ちは高ぶったままだ。

これから面白い事が起こるというのに、この私が興奮しないはずがない。

私は、面白い事は絶対という人間だから、なおさら。

しかし、それを周りに悟られる程、私も馬鹿じゃない。

だから、弟ともう1人、ろろう炉露^{ろろう}風以外に私の事に気付いた人はいない。

^{ろろう}炉露^{ろろう} 風とは、私の数少ない友人の1人だ。

かなり濃い隈が特徴的な美少女で、家は結構有名な、いわゆるお嬢様だ。

そして、この子は私に依存している。

なぜかは本人しか知りえない事だが、私に害はないので、放っておいている。

そっちの方が、いろいろと使えるしね。

「ねえなゆ、今日はご機嫌だね。何かいい事でもあった？それとも面白い事？」

相変わらず私に関する事に対してだけ、鋭い。

「やっぱり風には分かるか。」

ちょっとね。昨日、面白い事があつたんだ。そして、これからも。」
昨日の事を、これからの事を思い出すだけで、笑いがこみ上がってくる。

だからといって、笑ったりなんてしないが。
頬は緩んでいるかもしれないけど。

「そっか。良かったね！面白い事が見つかった。でも、面白い事ばかりで私の事忘れないでね？忘れられちゃったら私、寂しすぎてその面白い事、消しちゃうかも。」

そう言つて凧は、クスクスと可愛らしく笑つた。

でも、いくら可愛くても、凧でも、面白い事を消してしまうなら、
「凧、それは君次第だよ。忘れられるかどうかなんて。でも、面白い事をなくしてしまうなら、いくら渚でも、赦さないよ。」
容赦はしない。

「場合によつては、君との縁を切る事になる。それでもいいなら、なくせばいい。」

まあ、凧との繋がりを持つておきたいというのは多少、あるけどね。
使うっていう意味でも、個人的な意味でも。

でも、背に腹はかえられないってトコかな。
すると凧は

「…っごめんなさい！面白い事には何もしない。なくしたりなんか、しない。だから、何でもするから、嫌いにならないで。お願い、傍にいさせて…。」

と、泣きそうになつてしまった。

ちよつとやり過ぎたか。

元々、離れるつもりは少ししか無かつたしね。

凧は使える使えないをなしにしても一緒にいたいと思える、天然記念物並みに珍しい人間ひとだし。

そうそう手放したりはしないさ。

それを本人に言う気はないけど。

だつて言つてしまつたら、使えなくなるかもしれないし、面白い事

を消しちゃうかもしれないじゃないか。

こういう脅しは、実現しないからこそ、意味が有る。

もしかしたら、という思いを、利用するのだ。

卑怯なことをしているのは分かっている。

でも、それでいい。

私も屈も、解っているのだから。

まあ、

取り敢えず今回も、いろいろと手伝ってもらおう事にしようか。

物語を、より面白くするために。

第五話

奇妙で異様な利害関係。

退屈な授業も2／3が終わり、昼休み。

私は、屋上に來ていた。

もちろん、昼食をとるためだ。

それに、この学校の屋上は庭のようになっている、いわゆる屋上庭園というヤツだ。

それを見に來たのもある。

凧はいない。

先生に呼ばれたと言っていたから、後から來るのだろう。

凧はあれでも生徒会長なのだから。

人は見かけによらないって、本当だよ。

私は、人は見かけによらないって言うだけなら、別にいいと思うけどさ。

人を見かけで選^よるのは感心しないよね。

限りなくどうでもいい事だけど。

とりあえず、私は凧が來るまで、特に何もしない。

強いて言うなら、空を眺めているだけか。

あの私がそんな事するなんて、と思う人もいるだろう。

でも、空を眺めているのは結構好きだったりする。

特に理由は無いが。

流れる雲とか、小鳥とか、眺めるだけで楽しいし。

こういう所は、まだ壊れてないんだなあと素直に思える。

他人から見れば、十分壊れているのだろうが。

そして、なぜ昼食をとらないのかと聞かれると、風が来るまで食べずに待っていてあげよう、なんていう気遣いや優しさ、なんかじゃなく、ただ単に、私の昼食は風が持つてくる事になっているからだ。弟の分は別として、弁当を作るなんてそんな面倒臭い事、誰がするか。

購買に行くのだって、面倒臭い。

それに、人が多すぎる。

せっかく持ってきてくれると言う人がいると言うのに断るなんて、馬鹿のする事だろう。

他人の価値観は知らないが、私はそう思う。

遠慮？ そんなモノ、風に必要ない。

と、そんな事をつらつらと考えていると、ふと、後ろに気配を感じた。

風ではない。

風はこんな、うずうずしい、満たされているようで空っぽな、でもどこか懐かしいような雰囲気は、していない。

もっと違う、暗い中でも決して消えない、でも、すぐに消えてしまいくらいの灯りがあって、ねっとりとしつこい感じのはずだ。

私は緩みそうになる頬を抑えながら、ゆっくりと、振り返った。

そこには

あの少年が、

立っていた。

「昨日ぶりだね、少年。」

ずっと前からそこに居たかのように。

そこに居るのが、当たり前かのように。

そこに、存在していた。

不自然な程に、自然に。

第六話

信じないけど、信じて。

「さて、少年。君はどうやって屋上^{こゝ}まで来た？ 周りに飛び移れる場所はないし、扉の開く音もしなかった。それに、最初からここに居たわけじゃない。自分で言うのもなんだけど、私は人の気配には敏感だからね。」

―魔法使いでもあるまいし。

そう少年に聞いてみると、予想通りの答えが返ってきた。

「べつにどうだっていいよ、そんな事。なゆだって気にしてないはずさ。そうだろう？ 多少の興味はあったとしても、さ。」

まあ、少年の言う通りなのだけれど、気になるものは気になる。

だからと言って、今すぐ知りたいとも思わないけれど。

「それで、何の用？ わざわざ学校にまで来たんだからさ、随分と大層な用事なんだろう？」

口ではこんなことを言っているが、分かりきっている。

きつと、『なんとなく』とか、そんな感じだろう。

昨日少年が言っていた事―私と少年が同じ、ということ―が本当なら、の話だが。

「そんなこと、なゆも分かってるんじゃないの？ 特に理由なんてないよ。近くになゆを見つけたからね。少し話そうかな、って思っただけさ。」

やっぱり、私の考えは間違ってたみたいだ。

全然嬉しくもないし、反吐が出るくらいに嫌な事実だが。

まあ、それがどうであれ、私は少年と話せるのがあまり認めたくはないが嬉しいし、良しとする。
全然良くないが。

いや、少年がこの会話で私を楽しませてくれると言うのなら、話は別か。

私は一步、少年に近づいた。
少年も一步、私に近づいた。

「ねえ、少年。君は昨日、君と私は同じだと、そう言ったね。」
「そうだね。でも、それがどうかしたかい？」

少年は、心底分らないと言うように、首を傾げた。
表情は、変えないまま。

「いや、別に何でもない。ただの確認さ。気にしなくていい。」
「そう。それなら、そうさせてもらうよ。気にしない。」

そうは言っているけど、内心気になっているのだろう。
私と少年が同じなら。

「ねえなゆ、君はきっと、僕の言うことをこれっぽっちも信じてないね。特に、君と僕が同じだということを。いや、信じてないんじゃない。信じたくないんだ。違う？」

肩に乗った猫が、瞳を細めながら、私を見つめる。
少年と一緒に。

まさか気付かれるなんて思ってもみなかった私は、僅かに肩を跳ねさせる。

確かに、認めたくない。
信じたくなんか、ない。

理由なんて、分からない。解らない。
こんな感情は、知らないから。

識っているかもしれないが、
知ってはいない。

でも、私は、それでも虚構を保つ。
たとえばもう、気付かれてしまっている。

「何言ってるのさ、君は。私は君の言うことを全てとは言わずとも信じているさ。変なことを言わないでくれよ。」

いつも通りに。

何もなかったかのように。

そういう演技は、私の十八番だしね。

少年はそんな私の反応を見て、僅かに顔を歪めた。

嬉しそうに。

楽しそうに。

「ふうん。ま、いいけど。それよりさ、1つ、いいかい？」

少年は、私の事に気付いているのかいないのか、はたまた気付かない振りをしているのか、話を逸らした。

まあ、私にとっては都合がいいのでわざわざ話を戻したりなんかしないが。

「いいけど。さっきみたいな変なことじゃなければ、だけどね。」

少年がそんな事をしないのは分かっているが、一応言っておく。

「大丈夫。さっきの事は、もう触れないようにするからさ。だから、この質問に答えてよ。」

それを聞いて、私は内心、苦笑した。

拒否権なんて、無いじゃないか。

「分かった。それで、その質問とやらは？」

ならばさっさと答えてしまおう。

この少年の言いなりになるなんて、嫌だしね。

「簡単さ。ある人が言ったことについて、感想なんかを言ってくれればいい。」

「それなら、もったいぶらないで早く言いなよ。面倒臭い。」

1つの質問に、なぜこんなに時間がかかるのか。

不思議でならないね。

「まあそんな急がないでよ。時間がないわけじゃないんだからさ。でも、少し急いだほうがいいかな？ってことで、質問。」

ある人が、言いました。

“自分には、存在維持をするだけの、存在意義が、存在意味が、ありません。”と。
この言葉について、君はどう思う？
「
どうも何も、決まってる。」

「だから何。」

第七話

そんな人生、面白い？

私の答えを聞いて、少年はますます顔を歪めた。

愉快そうに。

私は表情を変えず、続けた。

「存在を維持するだけの、意義が、意味が、理由が無いから、だから何？だから死にます？だからそれに値するだけの意義を、意味を、理由をください？だから助けてください？だから助けてほしかった？まあ、どれでもいいけどさ、」

ああ、一気に喋ったから疲れたなあ。

そんな事を考えながら、言葉を吐き出す。

「甘いよ。甘すぎる。べったべたに甘いしぬるい。虫酸が走るね。だってさあ、そんな事言っさ、本当は自分を嘆いてるんじゃないかって、可哀想だなんて思っさほしだけなんですよ。そういう事を言っさ、助けて貰おうっさ。生きたいから、そんな事を言うんだ。」

そんな事を言う奴は、私がこの世で最も忌み嫌う人種だ。

何でも他人のせいにして、そのくせ何でも他人に求める。

生きる意味さえも。

だから、嫌いだ。

私は自分の事は自分で全部決めるし、最低限自分の言動には責任をもつ。

でも、さっき言ったような奴等はどうだ。

自分の事は他人が決めるし、自分の責任も他人に押し付ける。

迷惑極まりない。

し、情けない。

と私は思う。

「とにかく、そんな事を言った奴に一言とは言わず言いたいね。

甘えるな。

前なんて向かなくていい。

上だって見なくていい。

後ろを振り向け下を見ろ後悔しろ。

泣き喚け泣き叫べ泣き崩れろ。

何も受け取らずに受け入れろ。

でも言われた言葉が自分を傷つけるのならその言葉を受け入れるな
受け取ってそこに置いておけ。

何もかもを他人に求めるな自分の事は自分で決めろ。

愛を信じるな希望を持つな諦めて見限れ。

自分の道に自信を持って誇りを持って正義を持って胸を張れ背筋を伸ばせ。
そこでもし絶望に出会ったら手を繋げ仲良くしろ逃げだすな。

それが無理なら何も見るな何も話すな何も考えるな何もするな。

美しく在るな優しく在るな正しく在るな。

強かにもましてや易しくも在るな。

綺麗事を言え嘘を言え本音を言え。

無駄遣いしろ言い訳しろ誤魔化せ。

卑屈になれ怠ける曲がれ妥協しろ。

酷く弱く脆く醜悪になれ。

裏切って裏切って裏切れ。

敵を欺く前に味方を欺け。

敵を欺くために味方を欺け。

位置を知って全てを識ったような顔するな。

1を知って全てを悟ったような顔するな。

自分に頼れ自分に縋れ自分に従え。

自分を信じる自分以外を信じるな。

勝手に始めて勝手に終わらせろ。

呼吸が続くのが赦されるかどうかなんて考えるな。

きつと許されても赦されはしないだろうから無駄だ。

生きる事に疑問を持つなただひたすらに生きろ。

そうすれば、少しはマシになってるはずさ。

それでも、最悪な人間には違いけないけどね。」

そこまで言い切ると、少年は堪え切れないというように、笑いだした。

始めは、くっくっ…と、喉を震わすように。

次第に、大きな声をあげて笑いだした。

「あっはははは！！」

最高だよ、なゆ。最高の答えだ。僕の想像した通り。一語一句違わないよ。ああ、面白いなあ。本当に愉快だよ。やっぱり、なゆに聞いて良かった。」

興奮が収まらないというように早口で言いながら、目元の涙を拭う。どれだけ笑ったんだ。

と言うか、そんなに面白い事を言ったか？

私にとって、当たり前前の事を言っただけなのに。分からない。

と、漸く笑いの収まった少年が、今度は少し慌てたように言った。

「質問に答えてくれてありがとう、なゆ。次に会う時は、なゆが質問する番だから、何でも、何個でも聞いていいよ。時間の許す限りならね。

それじゃあ、”また”ね。」

言い終わった瞬間、屋上の扉が開いた。

見てみると、風が来るところだった。

再び少年の居た場所を見ると、居なくなっていた。

私は、それを見て、呟いた。

「“また”ね。次に会った時は、いろいろと聞かせてもらおう事にす

るよ。
いろいろと、
ね。」

第八話

分からない。判らない。解らない。

凧が小走りに駆け寄ってきて、目の前に立つ。

そして、微笑みながら私の顔を覗き込むように、首を傾げながら言った。

「どうしたの、なゆ。そんな所でぼーっとして。いつもと違うし、なゆらしくないよ。何かあったの？いつもより不機嫌そうで上機嫌そうに見えるけど…もしかして、何か嫌なことでもあった？だったらそれは何？誰がしたの？教えて、今直ぐ消してやるから。ねえ、それとも私に言えない事？そんな事無いよね、だっていつも何かあったら2番目に教えてくれてたもんね。だから…」

「落ちて着こうか、凧。」

「……………」

取り敢えず、凧のマシニングトークから逃れる。

私が止めないと、凧は声が枯れるまで、喉が潰れるまで、喋り続ける。

それは色々と困るし、今から話そうとしているのに、凧の声が邪魔になるからね。

それにしても、私はそんなに分かりやすく表に出ていたのか。気をつけないと。

でも、あの少年の前だと、不思議と感情が表に出やすくなる。本当に、何者なんだろうね。

と、少年の事はひとまず置いて、凧に話そうか。

「それで、風。君が先生と色々話してる時にね、あの子が来たんだ。」

「…！あの子って、面白い事？」

あはっ、やっぱり風は鋭いなあ。

私は少年の事を一度もあの子なんて呼んでないのに、気付いちやっ
た。

でも、鋭いと話が進めやすい。

「そうそう。やっぱり風はいいね。鋭くて。馬鹿に話すより楽だし、
何より話が進めやすい。」

「なゆ、褒めてくれた…！？ゆ、夢じゃないよねっ。わあっ、夢み
たい…！！」

褒めるんじゃ無かった。

喜んでる風は凄く可愛い。

でも、興奮してて、とてもじゃないけど話が出来る状況じゃない。

「…はあ。風、喜ぶのはいけど、話の後にしてね。」

「ごめんなさいっ。あんまりにも嬉しくて…。続き、話して？」

まだ少し息が荒いけど、まあ、大丈夫だろう。

…多分。

「それじゃあ続きを話すけど…。」

あの子、突然私の後ろに現れたんだ。どこから飛び移った訳でも
ないし、扉から来てもない。ましてや、最初から居たなんて論外。
私が気付かない訳ないしね。びっくりだろう？」

この事について、風はどんな事を言うのかな。

まあ、魔法を使ったとか、非科学的な事は言わないだろうけど。

「うーん、びっくりだねえ。どうやったんだろう？魔法なんてモノ
この世界に無いし…。気配を消すのが上手とか、そんな事か思い
浮かばないよ…。」

やっぱり、分からないか…。

面白い答え、期待していたんだけど。

今回ばかりは仕様がなかな。

「凧、そんなに考え込まなくていいよ。何となく聞いてみただけだから。それでね、その子と色々話したんだけど、その時にちょっと痛い所を突かれてね。機嫌が悪いのは、そのせいかな。」

私がそう言うと、凧は目を丸くさせた。

そして、信じられないというように、何度か瞬きをした。

凧が何故その事を信じられないのは分かる。

私は普段、滅多に感情や思っている事を悟られる事はない。

だから、会って間もない少年がそれをしたなんて、凧にとっては有り得ない、有り得てはいけない事なんだろう。

「それでね、その後、その事を脅しみたいにして、私に質問したんだ。ある人が言った事について、どう思うか。私の考えを聞かせて欲しいってね。」

「…それで、なゆは答えたんでしょ。」

あれ、凧の機嫌が悪くなってる。

何かまずい事でも言ったかな？

でもまあ、ご機嫌取りは話の後でいいか。

「そう、私は答えた。正直に、少しの偽りもなく、ね。それを聞いて、あの子、どうしたと思う？」

「さあ。なゆの言った事、馬鹿にしたの？それとも、なゆを軽蔑した？罵った？どれにしても、許せないなあ。赦せない。どうしてやろうか。ふふふふふ…。」

駄目だ。

完全に頭に血が上ってる。

目もすわっちゃってるし。

ああもう、放っという話そうかな。

変な人みたいだけど、それは凧のせいだし。

「あの子、笑ったんだよ。自分の予想通りだ、って。一語一句違わないってね。驚いたよ。まさかあの子が声をだして笑うなんて、思わなかったからね。」

話しながら、あの時の事を、思い出す。

そうすると、ふと、少年と私の笑い方は似ていると気付く。

普段は声を押し殺して笑うけど、興奮した時とかは、あんな笑い方をする。

それに気付くと、何とも言えない気分になってくる。

何だろう、この感じは。

気持ち悪い。

キモチワルイ。

私は一気に気分が悪くなり、話を丁度いい所で無理矢理切り上げた。

そして、風を言いくるめ、早めに昼食を済ませた。

それからは、授業も何も、身に入らなかった。

得体の知れない気持ち悪さと、よくわからない気持ちに氣を取られて。

閑話

だいじょうぶ、だいじょうぶ

「おかえり！」

私が家の扉を開けると、ただいまも言う間もなく声が聞こえる。そしてすぐ、ドタドタと足音を立てて、私の目の前に無邪気な笑顔を浮かべた10歳前後の少年が現れる。

「ただいま、彼方。」

私が言うと、その子は満面の笑みを浮かべた。

「おかえりなさい、お姉ちゃん。」

そう、この子は唯一私の本名を知っている人物。

私の弟だ。

名前は彼方。

私とは似ても似つかない程、無邪気で可愛い。

確か今は、小学4年生だったか。

私が自室に行き私服に着替えリビングに行くと、彼方は私の手を掴み、引っ張るようにしてソファへ連れて行く。

よっぽど話したいことがあるのだろう。

私をソファに座らせると、彼方も隣へと座る。

そして、どこか自慢気に、しかしどこか不満げに、話し始めた。

「あのね、今日、せんせーに褒められたんだ。

授業で当てられて、難しいのも、全部正解だったから。

体育で誰よりも上手だったから。

図工で誰よりもすごい物を作ったから。

彼方は誰よりも優秀だ、って。

褒められたんだ。

すごい？えらい？」

彼方は話し終えると、褒めて褒めて、と言うように、首を傾げ上目遣いで見上げてくる。

可愛い。

「うん。すごいしえらい。でもさ、褒められた事の殆どは初めてやった事なんですよ？」

私がそう聞いてみると、彼方は少し気まずそうに頷いた。

「授業で当たったのも、今日習ったばかりのやつで、体育も今日始めてやったやつだった。でも、全部ぜんぶ、できちゃったんだ。すっごく、カンタンに。」

さっき話してた時とは打って変わって、怒られた時のようにしょんぼりと、こちらを窺うように話す。

別に怒ってるわけじゃないんだけどな。

「彼方は天才肌だからね。殆どの事は簡単にこなせちゃうんだ。別にそれは悪い事じゃない。むしろ、すごい事で、誇るべき事なんだよ。でもね、今は大丈夫だと思うけど、彼方みたいな天才肌の人間は、気を付けなくちゃいけない。だって、」

「“天才は秀才に遠く及ばない”から、でしょ？」

私の言葉を遮って、彼方は続きを言った。

その後、悪戯が成功した時のような、少し意地の悪い笑みを浮かべた。

私は驚いたように目を少しだけ見開いてみせた。

「ご名答。その通り。天才は、努力なんかをしなくても、なんでもできる。でも、それ以外の人間は、天才を見て、羨み、妬み、嫉む。そして、天才になろうと努力する。大抵の人間は、その努力が無駄に終わるけど、数人だけ報われるヤツがいる。そいつらが、秀才と呼ばれる人間達なんだ。秀才は、別名努力の天才さ。努力すればする程、報われる。そしていつの日か、天才をも抜いて見せる。だから

らね、いくら彼方が天才だったとしても、努力を怠^{おこ}つちやいけないよ。怠^{おこ}けものは、天才でも秀才でもない。ただの、醜^{みにく}才^{さい}さ。」

「知ってるよ。だから僕、予習も復習も毎日欠かさずやってる。それにね、その話、お姉ちゃんが何回も話すから、覚えちゃったんだ。だから、だいじょーぶだよっ！」

彼方はそう言って微笑む。

私はそんなにこの話をしただろうか。

私が記憶する限りでは、まだ片手で収まるくらいしか話してないのだけれど。

でもまあ、彼方の記憶力からすると、1、2回話しただけでも十分覚えられるのだろうが。

私はソファから立ち上がる。

「さて彼方。夕飯は何がいい？今日は彼方の好きなものを作ってあげる。私が帰って来るまでいい子にしてみただし、先生からも褒められたみたいだからね。」

彼方は嬉しそうに顔を綻^{はな}ばせる。

やっぱり、私とは似ても似つかない程に、可愛い。

「わあいつ！ありがとう、お姉ちゃんっ」

そんな声を聞きながら、私はキッチンへと向かう。

言い忘れていたが、私たちに親はいない。

早くに他界してしまった。

まあ、別にさみしいとか悲しいとかは無いんだけど。

さすがにこの歳になってそういうのはないと思う。

彼方はどうか知らないけど。

さあて、何から作ろうか。

目茶苦茶で無茶苦茶な日の、ほんの少しの、平和な時間。

(ずっと続けばいいのに。)

（そう思ったことに、気付かない振りをして。
私は只々、何かを探す。）

第九話

変わらない、変わらない

あの少年と屋上で会ってから、数日がたった。

あの少年と会うわけでもなく。

何が起る事もなく。

つまらない日々が、続いていた。

でも。

これでいいのだと。

これがいいのだと。

思っている自分もいて。

あの少年に会いたいと。

あの少年に会いたくないと。

そう、思う自分もいて。

正直、私は混乱していた。

今までは、面白い事、楽しそうな事があれば、何よりも先にそれを優先していたし、（彼方は別だ）さらに面白くするためなら何だつてした。

でも、今回はそうもいかない。

モヤモヤしたものが、胸につつかえているような。

そんな、変な感じが無くならない、消えない。

この気持ちは、きつと、恋とかそういう甘いモノじゃない。

もっと違う、別のナニカ。

何なのか分からないけど、これだけは言える。

そんなに、混乱していたなんて。

相当、やばいのかも知れない。

何とかしなくては。

取り敢えずは、この気持ちか。

どうやったら、無くなるのだろう。

この、不快感は。

自問自答を繰り返しているような、感覚は。

少しイライラしながら、自室の扉を開ける。

と、そこには。

私を現在進行形で悩ませている、その原因がいた。

「久しぶり、なゆ。」

私と、誰かが重なる、重なってしまう、
最っ高に嫌らしい笑みを浮かべて。

第十話

世界はきつと、つまらない。

一瞬、何が起こったのかわからなくなる。

けれどもすぐに気を取り直し、“それ”と対峙する。

「何しに來たの、少年。」

きつと、私は少年を睨みつけているだろう。

声も、いつもより幾分か低い。

けれど、少年は臆することなく、話しかけてくる。

「別に、これといった用はないよ。ただなゆに会いたくなっただけから來ただけ。」

「そっか。私は会いたくなかったよ。今は特にね。」

私が態度を変えようともせずに話していると、少年は失敗したとでもいうように、首をすくめた。

その行為が、よけいに癪に障る。

「まあまあ、落ち着いてよ、なゆ。この前の事とかは謝るからさ。そんなあからさまに嫌そうな顔しないでよ。傷つくなあ。」

思ってもないことを。

「：最初っから、落ち着いてるよ。少しイライラしてるだけ。こっちこそごめんね、八つ当たりしちゃって。」

気持ちを無理やり落ち着かせ、言葉を紡ぐ。

この少年のペースに引き込まれるのは勘弁したい。

不快極まりないし、自分が自分じゃなくなるような感覚に陥るから。

「そっか、じゃあ心配は無用だったんだね。ごめんねー、変に氣遣っちゃって。」

「別にいいよ、お互い様だろう？それより、他の話をしよう。」

私は、勝手に椅子に座りくるくると回りながら話している少年に、言外で止まれと言った。

：伝わったかどうかは怪しいところだが。

「それじゃ、何の話をするの？」

私の思いは伝わったらしく、少年は回るのをやめ、私に聞く。

言外に、話なんてないのでは、と含ませながら。

「そうだなあ：君は、神様とやらを、信じるかい？」

少し悩むそぶりを見せてから、聞いてみた。

これは、前に会った時に聞こうと思っていたことだ。

前に会った時は少年のペースに引き込まれて聞きそびれたしね。

答えは、すぐに帰ってきた。

「うん。信じるよ、神の存在は。」

至極、つまらなそうに。

当然のように。

あらかじめ用意された答えを、言うように。

呟くように。

少年は答えた。

「：なぜ？」

意外だった。

少年と私が一緒だというのなら、信じないと言うと思ったのに。

絶対に信じないだろうという、確信に似た何かが私の中にあった。けれど、少年は神を信じると言う。

混乱している私をよそに、少年は続ける。

「だって、会ったことがあるからね。信じるしか、無いだろう？」

その声は。

何かを諦めているような。

何かを、後悔しているような。

そんな、響きがあった。

「会ったことが、ある？」

でも、私はそれに気づかぬふりをして、問いかける。

気にしてはいけないような気がするから。

「うん。信じられないだろう？ 神に、会ったことがあるなんて。でも、あるんだよ。別に僕は死んだわけでもない。前世の記憶があるとか、そんな事でもない。そんなこと、関係ない。でも確かに、会ったんだ。まぎれもない、“神”に。」

嘘をついているようには、見えなかった。思えなかった。

だからきつと、本当のことを言っているのだろう。

私がそう思ったんだ。

嘘ではない。

絶対に。

「ふうん。そっか……。じゃあ、その神様は、どんな奴だった？ 宗教であるような神様？ それとも、もっと違う、魔王のような感じ？ 教えてよ。」

神がいると分かったら気になるのはこれだ。

みんな全然違うことを言うけれど、どれが正解なのか。

それとも、正解なんてないのか。

「そうだなあ……。きつと、言葉では言い表せないよ。あいつはね、酷くちぐはぐで、不透明で、在ってないようなものだったからね。でも、あえて言うならば、あいつは綺麗事辞典だよ。綺麗事しか言わない。でもその割に根暗だし、存在感はすごいのに、そこにいる気がしない。顔は、嘘みたいに綺麗で美しいけど、見ていられないほど醜いよ。神だって言われれば信じられるけど、何も言われなかったら幽霊か何かと勘違いするだろうね。そんなやつだよ、神って。」

返ってきた答えは、信じがたいものだった。

そんなものが神だなんて、と思ってしまった。

でも反面、素直に信じている自分もいた。

神なんて所詮そんなものだ、と。

でも、最終的な、感想は。

「まるで、人間すべてを集めたみたいだね。その話を聞く限りでは。」「
こんなものだった。」

人間の、いいところや悪いところを全部合わせたなら、そんなものが
できるのだらうと、漠然と、そう思った。

「そうだね。あいつは、自分でもそう言ってたよ。自分は、人間が
持ち合わせる、全てだと。」

少年は、言い終えると目を細め、薄く笑った。

その顔が、誰かに似ていて。

なぜか無性に、泣きたくなった。

すぐく、懐かしくて。

でも、思い出せないことが、もどかしくて。

悲しくて。

少年は椅子から降りると、私の横を通り、扉から、出て行った。

私は、振り返ることが、できなかった。

後から、その時が初めて、私に見えるように、私の前から去ったの
だと気付いた。

気付いたところで、どうにもならなかったけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699x/>

僕。

2011年12月5日20時45分発行